

〈書 評〉

Shaping Society Through Dance: Mestizo Ritual Performance in the Peruvian Andes. Zoila S. Mendoza.
The University of Chicago Press, 2000. xv + 285 pp..

加 藤 隆 浩

誤解を恐れずに言えば、祭礼の調査は一面では容易だが、他方、それは難しい作業をも要求する。「容易」と言ったのは、祭礼は一般にその日時と場所さえ間違わなければ必ずその場で展開されるし、しかもそれは日常とは異なる形式で自分の目の前で了解可能なように繰り広げられるので、目的とする対象を確実にそれを分かって見ることができるからである。踊り・音楽その他の一連のパフォーマンスを「予定通り」に見物し、それをただただ再生ビデオのように長々と記述して終わる、というありがちな、しかし余り感心できそうもない「論文」が後を絶たないのもそうしたことに起因するのかもしれない。この種の記述ばかりを読まされているといつの間にか祭礼の研究がおっくうになったりもする。そのようにならないためにも、またそうに思わせないためにも、調査した成果をどのように分析するかという方法論上の工夫が必要となる。そうした工夫が実に難しい。祭礼研究が要求する作業の困難さはもちろんこの点にある。

「シカゴ民族音楽学研究シリーズ」の一冊として刊行された本書には、著者ソイラ・メンドサ Z. Mendoza 女史が自分で撮影し録音した祭礼の CD-ROM 1 枚が付き、別売でビデオ (77 分) も用意されている。こうした本作りをした彼女の意図はもちろん明白である。本書は、祭礼の安直な描写をやめ、その代わりに、フィールドワークで得られた民族誌的資料をいかに分析し、それをどのように展開していくか、またそこからいかなる結論が導き出せるのかということだけにテーマを絞っているのである。祭礼研究の本来あるべき姿がそこに凝縮されているわけである。著者の祭礼研究に対する姿勢は、彼女自身の論考 (Z. Mendoza 1988 “El surgimiento de un culto popular en oposición al culto de las minorías dominantes”, *Kamaq Maki* 2, pp.4-6, 16) — それは短いが極めて示唆的である。しかし、あまり流通しない雑誌に掲載されたので広くは知られていないのが残念である — 以来首尾一貫している。すなわち、伝統にがんじがらめになり一見すると毎年ただ繰り返されているように思える祭礼 (音楽や舞踊も含む) をははじめから動態としてとらえるという視点がそこにあり、本書もそうした観点からペルー・クスコ市近郊のサン・ヘロニモ地区のコンバルサ (仮装舞踊) を切り口として考察がなされる。ただし、書名にあるように、また著者自身が再三強調するように、本書は、ダンスそのものを対象とした研究でもなければ、ダンスをすること、またその儀礼的な意味に焦点を当てたものでもない。著者が究明しようとしているのは、メスティソが仮装しダンスを踊るといふことの社会的意味であり、究極的には、そのダンスの意味によって象られていくサン・ヘロニモという町の有り様とその変

貌のプロセスである (p.30)。したがって、儀礼のパフォーマンスが日常生活に深い影響を与えるプロセスを見るためには、人々の生活と祭礼とを媒介するコンパルサが、シンボリックな踊りのパフォーマンスを通して、どのような意味を創り出し、そこにいかなる内容を盛り込んでいくかに注目しなければならない。ただし、祭礼そのものはその町の日々日常の事柄ではないが、それが一年中、人々の話題となり重大な関心事であることを忘れてはならない。

こうした発想の基礎には、周到に準備されたフィールドワークに基づく、祭礼に関する著者の深い洞察がある。彼女は、問題とするカトリックの祭礼が教会にコントロールされ、刷新を抑制されたものと見るのではなく、そのダイナミズムのなかに新しい意味を次々に込めていくことのできる媒体であると捉える。ソイラ・メンドサによれば、サン・ヘロニモの人々は、日常生活で生起する諸変化、社会的出来事、関心事などについて様々な意見や考え方を有するが、彼らは、それをコンパルサというパフォーマンスの形で表明し、その中に彼ら独自の見解を忍び込ませ、さらにそうした認識を強化するのである。だから、著者は、祭礼をヴィクター・ターナー流に「過程」として分析するだけでは満足しないし、祭礼が社会・文化的変化を反映していると主張するだけでは不十分であると考え。彼女は、祭礼の中軸をなすコンパルサを支えるイデオロギーが社会を積極的に変え、また同時にその社会がコンパルサのイデオロギーの意味を変質させていくというような弁証法的相互作用のプロセスを見ようとしているのである。

では、そうしたコンパルサが内包するイデオロギーと社会の弁証法のプロセスにどのように斬り込んでいけるのか。著者はそこでアイデンティティに着目する。彼女によると、サン・ヘロニモの守護聖人祭は、サン・ヘロニモの住人がサン・ヘロニモ人としてその地域外の人々との関係において地域の明確なカテゴリーを意識し、地域アイデンティティを作り上げていく場である(第2章)という。またサン・ヘロニモの位置するクスコ市周辺地区には、白人・メスティソ・チョロ・インディオといった生物学的・文化的差異に基礎を置く民族・人種カテゴリーが存在し、それぞれが他のカテゴリーとの対比において自らを差異化し、己のアイデンティティを獲得しようとしている。ただし、そこで最も注目すべきカテゴリーはメスティソであるという。彼女は、これまでアンデス人類学がそのカテゴリーにほとんど関心を払ってこなかったという学史的経緯を指摘しながら、他方で、ペルー高地の一つの社会セクターとして社会全体を方向づけていく力を持ち、アイデンティティを生成し、それを再定義していくプロセスにあるのは、他ならぬメスティソであるとする (pp.9/13)。だから彼女は、クスコ市の近郊で商業的にも密接に関係する(つまり、経済的力を得て、近隣にも影響力をもつ)サン・ヘロニモ地区を意識的に選択し、その社会の調査に専念したのである。

ソイラ・メンドサはこのように、メスティソのアイデンティティを睨みながら分析を進めていくが、その際、コンパルサのダイナミズムを通して社会を眺望するという彼女の的方法論は、従来のアイデンティティ論からは引き出しえなかった斬新な結論を導くことになる。すなわち、従来の研究では、インディオとは誰か、はたまたメスティソやチョロとは何かというそのカテゴリーの要件についての議論が中心であり、目新しいところとしては、せいぜいある関係においてイン

ディオと同定できる人が他の関係ではメスティソともなりうるという、コンテキストの相違によるカテゴリーの流動性が指摘されるにとどまってきた。しかしながら、本書では人々がインディオあるいはメスティソという地位 (status) を獲得したり喪失したりする過程がコンパルサのパフォーマンスやそれと関わる日常の実践との関係で分析されていく。そして、そこでは、人々が自らのアイデンティティを変化させそうした「脱インディオ化」のプロセスによって、彼らがより大きな社会すなわち都市や国家 (また、それらの文化) の関わりを強めていく有り様が浮き彫りにされていく (第7章)。結果として、現代ペルー社会の地域レベルの民族・人種関係を理解するためには、それを流動化させている要因として都市／農村という二元論、国民文化、ジェンダーさらには「民俗的」なるものを希求するペルー以外の人々との交わりの中で、国家の枠組みを越えたグローバル・カルチャーなどの要因も含めた幅広い議論が必要であることが示される (第8章)。

以上、本書では、メスティソのコンパルサによって手に入れた「脱インディオ化」への弾みが、地域住民のアイデンティティや社会の変貌とどのように結びつくか、またそのプロセスはどうなっているのかが探求される。要するに、本書は、社会の有り様を変貌させうるダンスの潜在力に注目し、社会変化を分析するという画期的な視座を提供するとともに、そこから引き出された結論も、従来の議論に新しい知見を添えるものとなっている。ただし、本書で考察されたのは主にマヘーニョと呼ばれるコンパルサであり、クスコ地方には他にもまだ数多くのコンパルサが存在していることも確かである。したがって、今後そうしたコンパルサにも同様な関心が注がれ、さらなる研究がなされることを期待したいと考える。とりわけ、本書で著者が取りあげたメスティソのパフォーマンスとは対極に位置する、インディオを表象し、インディオ性を全面に押し出すダンスを切り口とすると (本書でも言及はあるが)、同じサン・ヘロニモ社会はいったいどのように見えてくるのか、評者のみならず、多くのアンデス研究者が関心を持つところであると言えよう。

(三重大学教授／文化人類学)

